

只見の町おこしとSDGsの推進のために  
田子倉湖の厄介者「ブラックバス」を、町の特産品にするために



堀金康太(ほりかね こうた)  
福島県立南会津高等学校 1年

## 只見の町おこしとSDGsの推進のために

田子倉湖の厄介者「ブラックバス」を、町の特産品にするために

堀金康太



### 活動概要

#### 活動の内容

私はブラックバスについて無知であり、自分では入手できないため10月中旬に漁業組合の方に連絡して冷凍のブラックバスをいただきました。

その後、ブラックバス料理にブナの実を使用したいと考え、ブナセンターに行ってブナの実を取れる場所を聞き、実際にブナの森へ出向いてブナの実を採取しました。

さらに、ブラックバスを多くの人に食べていただきたいと考え、町役場に行きました。そこで、町文化祭で出品してはどうかというご助言をいただき、専用ブースでブラックバスのから揚げを提供し、プレゼンテーションも行いました。

#### 活動の特徴(新規性・発展性)

「食べて楽しむ」ということに注目しました。外来種であるブラックバスは、食品として扱われず処分されています。ブラックバスを食品として活用し、町の特産品として観光客や町民にも広く食べていただくことにより、名産品とすることができるのではないかと考えました。この活動は、町内の飲食店ともコラボレーションすることにより、メニューの幅を増やすことや飲食店を活気づけることができると考えます。

#### 活動の成果

ブラックバスという一見邪魔ものに見える生き物に、別の視点から目を向ける機会を設けたことで、観光客や町民に只見の自然について改めて考えてもらうことができました。実際、只見町にて行ったブラックバス試食会で取ったアンケートでは「大人が考える良い機会を与えてくれてありがとう」や「外来魚として地元で駆除されているブラックバスがこんなにも美味しく調理されたことに驚きです。」などのコメントがありました。

### 課題の設定と意図

私の住む只見町は、以前ダム建設が行われ、かつて15000人ほどの人が住んでいました。現在は「過疎化」「少子高齢化」が進み3900人ほどに減少してしまいました。私はこのままでは町に活気がなくなってしまうのではないかと危機感を覚えました。

只見町にはかつて、全国有数のローカル線である只見線が走っていました。只見線は2011年に新潟・福島豪雨災害に見舞われ運休していましたが、長年にわたる工事の結果、今年の10月1日に全線開通しました。全線開通で町に元気が戻ってきたように感じた私は、その追い風を利用したいと思いました。

そこで思いついたのは、田子倉ダムです。只見町はダムの町として有名なので、田子倉ダムにある田子倉湖に着目しました。その田子倉ダムによってできた田子倉湖では最近ブラックバスが増えきて、厄介者になっているという話を聞きました。外来種であるブラックバスが田子倉ダムに住み着いて、ワカサギを食べてしまうのだそうです。それにより、ワカサギ釣りをしにくる観光客がここ数年は大きく減っているとのことでした。そこで町の厄介者であるブラックバスを町おこしに活かせないかと考えました。

### 課題解決のための仮説と計画

まずは、只見町が抱える「町に活気がない」という課題を解決する方法をどうしたらよいか考えました。そこで、只見産の物を使って町の特産物を作ることができれば、町がもっと活性化するのではないかと考えました。

数年前から、「観光客がブラックバスを釣り焼いて食べている」と話を聞いたことがあった私は、只見町で厄介者とされているブラックバスを利用して料理を作ってみてはどうかと考えました。また、夏場に外来種のブラックバスを釣ることで、ワカサギを釣りをしにくる観光客の増加も見込めます。その際、認定ユネスコエコパークの只見町で有名な自然林「ブナ」の実を、料理の臭み消しとして一緒に使ってはどうかと考えました。また、もう一つの町の特産物である「エゴマ」の活用も考えました。

次に、ブラックバス料理を実用化するにはどうすればよいか考えました。実用化するためには、一定の評価を得る必要があるため、多くの人に食べてもらって感想を聞く必要があります。そのため、「只見町の文化祭」でブラックバス料理を試食という形でブース出展して提供し、アンケートをとればよいのではないかと考えました。アンケートをとったのちに集計し、結果を分析して見える化して町を活気づけるための解決策を検討しようと計画しました。



## 活動で工夫できたこと

私が合宿を通して学んだ事は、「どのようにして厄介者を地域おこしにするか」という地域再生の視点です。一つ目に福島市について発表した参加者の「過疎化した地域を皆が気軽に集まれる場所にする」というアイデアから学ぶことができました。

二つ目に学んだ事は、「マイナスなものをプラスの視点に変えてみる」ということです。会津若松市について発表した参加者は、会津若松市の空き家が増えているというマイナス面をリフォーム・リノベーションにより再活用するというプラスの視点に置き換えて考えていました。この考えは只見町の厄介者である「ブラックバス」をプラスの視点に置き換え、町の特産物として何とかできないかというアイデアを考えるきっかけになりました。

三つ目に学んだ事は、「何でもいので、とりあえず行動してみる」ということです。世の中には、いろいろな問題があります。それらについて、今までは他人事のように考えていたり、誰かが何とかすればいいと考えていたりしていました。

講師として来ていただいた猪苗代町・地域おこし協力隊の長友さんは、地域の厄介者である「ヒシ」を食べるという発想を実際に試し「ヒシ茶」の開発にこぎつけ、今では全国的に活動を展開しています。

また、その中で「とりあえず意見を出してみる」と「自分で物事を考えること」の大切さについても改めて学ぶことができました。実際に行動を起こすためには、意見を出したり、自分で考えたりすることが必須だからです。

四つ目に学んだ事は、「人に物事を伝える力」「プレゼンテーション力」です。今回の実践活動では、只見町の文化祭で特設ステージを設定していただき、自分で作成したプレゼンテーションの発表を行いました。合宿の参加者の中には、見ている人を笑わせたり、納得させたりする発表も多く見られたので、それを参考にして何度も練習し、納得のいく発表にすることができました。



## 活動で得た学び・気づき

いかに人に興味をもってもらうかがポイントだという事を学びました。只見町では過疎化が進んでおり、町外への人口流出が止まりません。そんな中で町おこしをするためには、どうやって人を集めるかを考えなければなりません。他の人が興味をもつような発想の転換をする事が町おこしでは大切な事だと学びました。

また、ブラックバスを調理して試食として出展するという事の難しさを学びました。調理は簡単のように思えますが、不特定多数の方に提供する場合は衛生上の問題もあり、食中毒になれば責任問題となります。そこで今回は、食品衛生責任者の資格を取ったり、文化祭の実行委員会へ電話をして、試食を出せるか確認したりといった対応をしました。大変な分、食の力というのは説得力があるということも分かりました。実際に町の文化祭で試食を提供した所、食べた方から「意外とおいしいもんだね。」「うまい！食べやすいね！」「おいしい〜。もっと食べたい。」といった感想が聞かれました。その時、どの人もさわやかでうれしそうなお表情でした。私はあの時の表情が今でも忘れられません。本当に心が動いた瞬間ではないかと思いました。食というのは準備は大変ですが、人の心を動かす力があることを実感しました。

また、今回の実践活動で探究活動の進め方も学習しました。最初は自分の構想をどのように進めていけばいいか全く分かりませんでしたが、国立磐梯青少年交流の家で開催された「オリエンテーション合宿」の講師だった前川先生の講義を思い出したり、自分の学校(福島県立南会津高等学校)の先生方にご助言をいただいたりしながら、特定非営利活動法人ただみコミュニティクラブや只見町・伊北地区(非)漁業協同組合・只見町プラセンター等と連携して進めることができました。地域おこしのためには、地域の良さを総合的に把握し方向性を決めていく必要があります。そのための進め方について理解を深めることができました。

## 今後の展望・新たな取組み

今後は、町と連携をしながら「ブラックバスのブナの葉蒸し」「焼き」等の料理を商品化して進めていき、販売をしてもらえる業者も探していきたいです。地元には「只見特産」等の地場産品を商品として扱う会社がいくつかあります。このような会社へ広報へ向かい、少しでも協力していただき、商品として扱っていただけるよう働きかけていきたいです。また材料の調達については、地元の漁業共同組合やプラセンター等と話し合いを進め、仕入れを担当していただける個人や会社等を探していきたいと考えています。

上記のようなステップを踏んでいく事で、只見町の目玉として本プロジェクトが産業として成立していくと思います。加えて、只見町には障がいのある方の就労施設がありません。ブラックバス事業が実用化できれば、これに関わる仕事が発生し、障がいをもった方の就労支援にも役立っていくと私は思っています。

ブラックバスの商品化にはプラス要素もあります。田子倉湖のブラックバスはワカサギを食べてしまう外来魚として扱われています。ブラックバスの増加により、今まで秋から冬にかけて多く来ていたワカサギ釣りのための観光客が減ってきているのです。ブラックバスの駆除も兼ねた本プロジェクトを進めることで夏のブラックバス釣りやワカサギの数も元に戻していきたいです。そして、ブラックバスとワカサギ釣りとしての有名スポットにすれば、さらに集客には有利になると考えられます。

オリエンテーション合宿で学んだ事も、今後の自分のために生かしていきたい事がたくさんあります。まず、オリエンテーション合宿の参加者の発表は、どれもSDGsを意識したものでした。自分も、過疎化が進む只見町の起死回生の作戦は、SDGsNo. 8, 12に該当すると思っています。これからも、私はSDGsの視点で生活をしていきたいと考えています。日ごろから皆がそういう視点で生活をすれば、様々な視点から只見町の良さが増えていくことになると思いますし、それが町の活性化につながっていくからです。

また、オリエンテーション合宿の参加者の多くの方が、「自分で企画してどんどん発信していきたい。」と言っていました。どんなに良い企画を考えても、それを発信しなければ意味がありません。私は、効率的な広報の仕方の重要性についても学びました。現代社会においては新聞やポスターだけでなく、インターネット、ユーチューブ、インスタグラムやフェイスブック等のSNSも充実しています。只見町にポスターを貼っても、回覧板に掲載しても、ほとんど町内の方しか見ないと思います。私はこれからの広報においては、SNSをどう工夫するかが鍵だと思っています。それぞれのSNSには長所や短所といった特質があるので、それらを見極め、一番効果的な方法で広報を進めたいです。もちろん、ありきたりの方法では効果が無いので、発想の転換をして工夫して進めたいです。

## 1. 地域探究アワードエントリー情報

エントリー希望	有	エントリー単位	個人	ブロック	東北
グループメンバー	氏名①			氏名③	
	氏名②			氏名④	

## 2. オリエンテーション合宿及び実践活動の基本情報

合宿実施先	国立磐梯青少年交流の家	修了日	2022/7/18	カリキュラムのタイプ	A
フィールドワークの内容	猪苗代町にある猪苗代湖に出向き菱刈や湖岸清掃などを行い地域をよくするためにどうするかを学んだ。また、菱問題の解決方法なども学んだ。				
実践活動期間	2022/10/1 ~ 2022/11/8				
活動のタイプ	新たな活動				
協力者		主な協力者		協力内容	
	所属	特定非営利活動法人ただみコミュニティクラブ		実践活動の方向性についての指導助言	
	氏名	平山 真恵美			
	所属	福島県只見町町長		只見町文化祭でのブース出展への支援協力	
	氏名	渡部 勇夫			
	所属	伊北地区(非)漁業協同組合代表理事組合長		田子倉湖のブラックバスについての情報説明と実物提供	
氏名	目黒芳雄				
協力者総数	25名				

## 3. 実践活動の記録

(1)総活動日数 全 38 日

事前:準備・打合せ	13日	本番:メインの活動	15日	事後:ふりかえり・報告	10日
-----------	-----	-----------	-----	-------------	-----

(2)活動成果の発信等

媒体	方法	回数	概要・備考
その他	自ら発信	1回	只見町の文化祭において自分の取り組んでいる活動のプレゼンテーションを行った。
その他	自ら発信	1回	只見町役場で活動を町長さんや教育委員会の方に発信しました。
その他	自ら発信	2回	学校の生徒などに行っている活動を自ら発信しました。

(3)主な活動記録

活動日時	区分	活動場所	活動内容
10/1 ~ 10/5	②実践活動本番	漁業協同組合の方の家	田子倉湖のブラックバスの説明と冷凍のブラックバスをもらいました。
10/7 ~ 10/11	②実践活動本番	只見町ブナセンターや檜戸ブナの森	ブナセンターでブナの実が取れる場所を聞き、実際に山に行きブナの実を確保しました。
10/23 ~ 10/23	②実践活動本番	只見町役場	只見町文化祭での出店やアンケート実施についての交渉に行きました。
11/3 ~ 11/3	②実践活動本番	只見町振興センター	ブラックバス料理の試食とアンケートを行った。また、プレゼンテーションも行った。
11/4 ~ 11/11	③事後打合せ・報告会等	南会津高校校舎	文化祭で取ったアンケートを集計し、グラフにして具体的な数字を出した。